



写真46 台湾 旧花蓮港庁下、壽庄に建てられた壽社跡
現在は中山公園になっている。階段は旧神社時代のもの。



写真47 南洋群島 テニアン島、旧第4農場の関係者によって建てられた日之出神社跡
現在はロータリー(公園)になっている。



写真48 台湾 旧花蓮港庁下、研海庄に建てられた新城社跡
旧境内の半分は現在、天主教会の敷地になっている。天主教会の標識が架かる一の鳥居。



写真49 同前
燈籠は宝珠・火袋の部分が改変され、また彩色されている。



写真50 同前
旧本殿基壇の上にマリア像が立つ、また、松の大き木が周囲を囲んでいる。

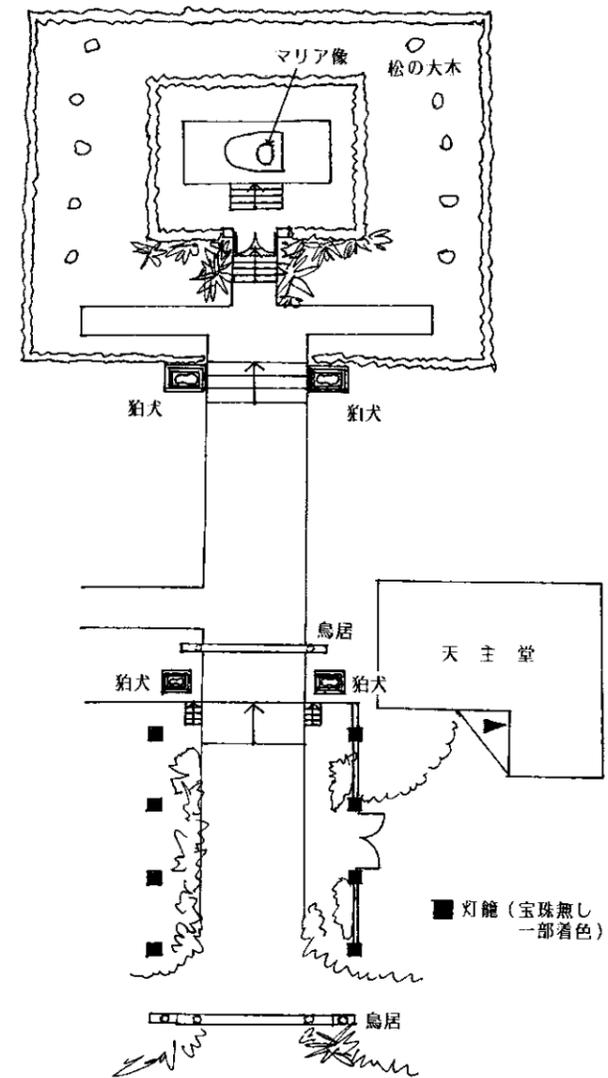


図2 台湾 旧新城社跡(現天主教会)現況図
(拙稿「台湾の神社跡を訪ねて」、『歴史と民俗』10号、1993年8月、92頁)

紹介したように、境内の半分は新城公園となっているが、残りの半分は天主教会となって利用されている（写真48）。しかも、鳥居2基、燈籠（写真49）8基、狛犬4体、本殿基壇等が部分的に改変されながらも極めて良く残っている（図2）。旧本殿部分は「聖母園」と命名され、旧本殿の基壇の上にはマリア像が建てられている。また、それを取り囲むように松の大木が育っている（写真50）。マリア像がなければ、ほぼ完璧に神社の社殿といった雰囲気である。いずれにしても、日本人の常識的な教会の景観としては異様なものであった。

台湾には、もう1つ、教会に改変されたものがある。旧花蓮港庁下、鳳林郡馬太鞍にあった馬太鞍遙拝所（創立年不明）跡地に建てられた光復教会である（写真51）。現在、遺構・遺物は残っていなかったが、門に至る道は旧参道である（写真52）。

なお、この教会には、この地で布教活動にあたった許南免牧師の記念館がある。その入口には、許牧師の「行い」を讃える板碑が掲げられているが、その「序」には、日本統治下のキリスト教の迫害について次のように記してある。「（第2次世界大戦の勃発とともに＝筆者）漸受日警嚴密監視伝道不易每於更深夜静聚集於曾王蘭宅查經学道信者惨遭害遂或被拘捕禁錮者甚衆」。

次に、南洋群島の例である。まず、ロタ島の中心街ソソソに1939年に建てられたロタ神社の例である（写真53）。神社は、マニラ高地が海岸に迫って崖を成しているその下部、崖を背景として建てられていた。現在、本殿基壇、拝殿の基礎部分、そこに至る階段部分が残っているが、本殿基壇の上には白い教祠が設けられ、キリスト像が祀られている（写真54～56）。

また、テナン島マルボ市街の山裾に1939年に建てられた和泉神社（氏子区域マルボ市街並びに第2農場）も同じくキリスト教祠となっている。現在、本殿の基壇とそれを取り巻く玉垣が残っているが、本殿基壇の上にはキリスト教祠が建てられ（写真57）、その中には聖イシドロ（農業守護聖人）像他のキリスト教関係像が祀られている（写真58）。本殿跡の周囲はこの教祠の祭り（聖イシドロ祭。テナンにおけるキリスト教界の二大祭の一つ）に使われるいくつかの施設が建てられている。

教会・教祠ではないが、キリスト教墓地として利用されている例もある。サイパン島の南興神社跡地である。南興神社は1937年チャランカに建てられた。氏子区域が南洋興発会社員及びチャランカ町一円とされているように、チャランカの町には、日本の南洋群島開発に巨大な役割を果たした南洋興発株式会社の本社があり（1923年～1942年）、製糖工場や燐鉱工場、倉庫群、社宅群が立ち並んでいたいわば企業城下町であった。南興神社の南興はこの南洋興発株式会社の名前をとったものであった。

この跡地には、鳥居（写真59）、燈籠4基（2対、内1対は旧本殿基壇上、白く上塗りされている）、そして旧本殿基壇が残っているが、今日、境内地一体が教会墓地になっている。旧本殿基壇の上には白い小屋が設けられ、十字架に磔になったイエス像が祀られており、また基壇の前にも苦しみに耐え横たわるイエス像が置かれている（写真60）。

なお、この南興神社の隣には製糖工場があったが、現在ここには大きな教会が建てられている。

次に、寺院となった例を紹介しておこう。台湾旧花蓮港庁下壽庄に建てられた豊田神社である。豊田神社は1915年に同庄の豊田村に建てられた。豊田村は1910年代に台湾総督府が造った移民村の一で、花蓮港庁にはこの豊田村の他に吉野村、林田村などが建てられた。したがって、この神社は「内地人官営移民村の守護神として総督府において建立鎮座せし」ものであった。この神社跡には鳥居1



写真51 台湾 旧花蓮港庁下、鳳林郡に建てられた馬太鞍遙拝所跡
現在、光復教会が建つ。



写真52 同前
教会への参道は、旧遙拝所への参道であった。



写真53 南洋群島 ロタ島、ソソソに建てられたロタ神社
「日支事変武運長久を祈る」（沖縄ロタ会『ロタ会誌一創立10周年記念一』、1990年11月、182頁）



写真54 同前跡
現在キリスト教祠になっており、旧拝殿基壇の上には小屋がしつらえている。



写真 56 同前
キリスト像

写真 55 同前
旧本殿基壇の上にはキリスト像が祀られている。



写真 59 南洋群島 サイパン島, チャランカに建てられた南興神社跡
キリスト教会の墓地の中に立つ鳥居. 真っ白に塗られている。

写真 60 同前
旧本殿基壇の上に小屋がしつらえられ, 中に十字架に架けられたキリスト像が立つ. 階段左脇にも苦悶するキリスト像が横たわっている。



写真 61 台湾 旧花蓮港庁下, 豊田村に建てられた豊田神社跡
現在碧蓮寺が建つ. 碧蓮寺の標識が架けられている旧一の鳥居。



写真 62 同前
碧蓮寺の入り口に立つ燈籠。



写真 57 南洋群島 テニアン島, 旧第2農場の関係者によって建てられた和泉神社跡
旧本殿基壇の上にキリスト像とサン・イシドル像が祀られ, キリスト教祠となっている。



写真 58 同前
キリスト像と聖人イシドル (農業守護聖人) 像

基（写真61），燈籠4基（2対）（写真62），狛犬2体が残存しているが，今日碧蓮寺に「改変」されている．境内には松や楠の大木が繁っている．

最後に，廟・小祠として利用されている例を紹介しておこう．台湾花蓮港庁下の3つの社（祠）である．太巴壠祠は1937年，鳳林郡太巴壠に鎮座した社（祠）であるが，現在は協天宮となっており，1931年に玉里街に鎮座した観音山社は福德祠という小祠になっていたが，いずれも神社の遺構・遺物は発見されなかった．もう一つの織羅社は廟建設中でブルドーザーによって整地がなされていた．

この他，個人の墓地として利用されている例は，台湾旧花蓮庁下瑞穂庄に建てられた抜子社（1933年鎮座）である．この神社跡地は比較的神社の面影をよく残している．階段，燈籠4基（2対），鳥居の柱穴4つ（2対）などが残っている．階段を上りきったところに個人の墓地があった．

[忠烈祠]

宗教施設といっても良いのだが，戦前の日本の靖国神社・護国神社と同様，いわば国家的祭祀施設として利用されているのが，台湾の神社跡地である．

台湾神宮を除いて，台湾に建てられた官国幣社，県社クラスの多くの神社跡地が，忠烈祠として利用されている．忠烈祠とは，中華民国の建国以来の抗日戦争，戦前・戦後の国共内戦，国民党政府が台湾に移ってからは，金門・馬祖の戦争などにおいて戦死した兵士を祀る施設である⁽²⁷⁾．

1940年に日本の靖国神社・護国神社の制度に倣って，台北市に台湾護国神社が建てられたが，戦後は台湾の忠烈祠に改変された．筆者が見た限りでは，護国神社の遺構・遺物は全く発見できなかった．1916年に創立された花蓮港庁の中心的な神社，花蓮港神社（後に県社）は南に花蓮港市街，東に太平洋を望む小高い丘（米崙山）の中腹に建てられた神社であったが（写真63），今日花蓮縣忠烈祠となっている．ここでも，階段部分を除いてその他の神社遺構・遺物は見ることは出来なかった．この，花蓮港神社は川（米崙溪）に掛かる吊り橋のある神社として有名であったが，今日はコンクリートの橋が架かっている（写真64）．

1912年に鎮座した，高雄市の高雄神社（後に県社）（写真65）も今日，高雄市の忠烈祠になっている．ここでは，燈籠（上部は改変）や階段（写真66），鳥居（写真67）などが残っている．

このほか，筆者が直接見た神社跡地で忠烈祠に「改変」された例として，桃園神社が桃園縣忠烈祠となっている事はすでに見た通りである．

[記念碑・記念館など]

神社跡地に記念碑や記念館が建てられている例もある．

1923年に台湾，花蓮港庁下の「蕃地」（先住民族の居住地）タビトに建てられた佐久間神社は，今日，文天祥の銅像並びに正気歌の歌碑が建てられている．蕃地タビトは今日では天祥と呼ばれ，タロコ国立公園の中心地になっている．この地は，3,000Mを超える中央山脈から太平洋に流れ込む立霧溪の激流が大理石の深い峡谷を作りあげており，断崖絶壁の峡谷にタロコ族の部落（社）が，点々と存在していた．

日本の台湾植民地支配にとって，漢民族による抗日武装闘争とともに，山岳先住民族の抵抗にも大きな力を注がなければならなかった．この，山岳先住民族の統治に大きな役割を果たしたのが，「理蕃総督」といわれた第5代総督佐久間佐馬太（1906～1915年）であった．佐久間は険しい峡谷を利用して最後まで戦いを継続していたタロコ族を，自ら軍隊・警察を率いて，5年もの歳月をかけて



写真63 台湾 旧花蓮港庁下，花蓮街に建てられた花蓮港神社
吊り橋の架かる珍しい神社であった。（松本暁美・謝森展前掲書，247頁）



写真64 同前跡
現在，花蓮縣忠烈祠に改変されている．

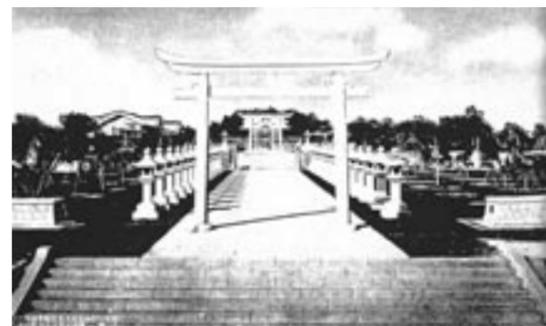


写真65 台湾 旧高雄州下，高雄市に建てられた高雄神社
（松本暁美・謝森展前掲書，246頁）



写真66 同前跡
今日，高尾縣の忠烈祠に改変されている．社殿に上る階段は，旧神社時代のもの．



写真67 同前跡
笠木の上に，屋根が被せられた旧高尾神社の鳥居

1914年によくやく制圧した。佐久間神社は、この作戦中に佐久間総督が重傷を負った「ゆかりの」地であり、後、タロコ警察行政の中心地となったこの地に、総督の名をとり、また総督を祭神として建てられた神社である。そういう意味では、日本（総督府）の山岳先住民族支配のシンボルの存在であった。⁽²⁸⁾

今日、この神社跡には、長い階段や石組み等が残っているだけで（写真68）、その他の遺構・遺物は無い。そして、ここには石段の途中、旧拝殿あたりに文天祥の銅像（写真69）が建てられ、さらに上った旧本殿あたりに、彼が詠った「正気歌」の歌碑がたっている。文天祥は南宋末の宰相で、元の支配と戦い、捕らえられたが、最後まで漢民族の宋王朝への忠誠を曲げずに処刑された「忠臣」であり、彼が獄中で作った長詩「正気歌」は、この宋に忠誠を尽くす気持ちを詠った有名な歌である。ちなみにこの歌は日本においても、藤田東湖や吉田松陰といった、幕末の「勤皇の志士」達にも大きな影響を与えたものである。台湾政府（中華民国）の漢民族の国家としての正当性をアピールする意図をもって建てられたものであろう。

神社跡地が、社殿部分を中心に記念碑・記念館などに「改変」されて利用されている例は、もう一つ、南洋群島のロタ島に建てられた大山祇神社（マニラ神社）（写真70）である。大山祇神社はマニラ山（サバナ高地）の最高地を北側に少し下った平坦部に建てられたが（創立年不明）、ここは南洋興発株式会社の燐鉱山（1935年発見）があった所である。鉱山の神ということで大山祇命が祀られた。ロタ島が海底から隆起した事を証明する、安山岩の双子岩（貝殻が多数付着）を背景に、社殿と鳥居等が建てられていた。今日、社殿の基壇のみが残っているだけであるが（写真71）、その基壇の前方に「平和の礎」が建てられ、その前の広々とした境内部分は草地となり、また休憩所も建てられて、ピクニック地を兼ねたメモリアル・パーク的（写真72）なものになっている。

この、「平和の礎」は、1973年9月に建てられたもので、経緯を書いた石碑には「第2次大戦中ロタ島に於て戦没されたすべての方々の御霊を慰めるとともに、ロタ島の人々及び日本国民との友情と親愛を深め恒久平和を祈願して建立されたものである。1973年9月16日 平和記念碑建立委員会 アントニオ Ca. アタリ ロタ島政府市長 プルデンシオ T. マングローナ ロタ島地区行政官」とある。

この他、神社跡地全部が記念碑等になったのではないが、神社跡地が公園として整備された所では、その中の一部に記念碑等が建てられている。たとえば、先に見た中山公園となっている台湾の壽社には孫文の銅像が建てられているし（写真73）、朝鮮の龍頭山神社跡地の龍頭山公園には、秀吉の朝鮮出兵時（文禄の役）、朝鮮の水軍を率い亀甲船を考案して日本の水軍に大打撃を与えた英雄、李舜臣の銅像が立っている。さらに、朝鮮神宮跡地の南山公園には1909年、初代統監伊藤博文を射殺した、朝鮮の独立運動家安重根の記念館が建てられている。

【教育施設】

神社跡地が学校や幼稚園として利用されている場合も多い。関東州の大連神社は1909年、大連の南山に創立された神社で、関東州・満州に建てられた神社としては、同市の転山屯に建てられた関水神社に次いで二番目に早く建てられた神社である。

また、大連神社は1944年、旅順に官幣大社関東神宮が鎮座するまで、大連だけではなく関東州の中心的神社であった。境内地約3万坪、本殿など社殿は11もある官国幣社クラスの神社であった。



写真68 台湾 旧花蓮港庁下、蕃地タビトに建てられた佐久間神社跡
旧階段。この上に文天祥像と正気歌の歌碑が建つ。



写真69 同前
文天祥像。後方に巨大な歌碑の1部が見える。



写真70 南洋群島 ロタ島、サバナマニラ高地に建てられた大山祇（マニラ）神社
（沖縄ロタ会前掲書、182頁）



写真71 同前跡
旧本殿基壇。



写真 72 同前跡
旧社殿前には 1973 年 9 月、ロタ島の政府関係者等による「平和記念碑建立委員会」の手によって、記念碑「平和の礎」(細見卓・書)が建立され、メモリアル・パークとなっている。



写真 75 樺太 旧大泊支庁下、大泊町に建てられた垂庭神社 (樺太庁前掲書、1537 頁)

写真 73 台湾 旧花蓮港庁下、壽庄に建てられた壽社跡
中山公園に改変され、旧社殿跡に孫文像が立つ。



写真 76 同前跡
旧階段と燈籠基壇、それに手水鉢 (階段左、二本の樹の左側に見える)が残る。



写真 74 関東州 旧大連市に建てられた大連神社跡
現在小学校の敷地となっている。



写真 77 同前跡
旧社殿跡地に建つ、船舶カレッジの建物。

今日、神社の遺構・遺物は全くなく、小学校の校舎が建ち（写真74）、またグラウンドとして利用されている⁽³⁰⁾。

満州の長春（後、新京特別市）敷島区に建てられた、長春（新京）神社は1915年に創立された長春の中心的な神社であるが、現在は幼稚園になっている。これについては前に見たので省略する。

樺太の垂庭神社は、1914年旧大泊支庁大泊町に建てられた後、県社となった、大泊支庁の中心的神社である（写真75）。今日、階段、燈籠基壇、手水鉢、鳥居の礎石らしきものが残っているが（写真76）、階段を上りきったところは船舶カレッジのキャンパスになっている⁽³¹⁾（写真77）。

この他、南洋群島のテニアン島全体の鎮守として、1934年に建てられた天仁安神社は1944年7月の米軍の爆撃によって完全に破壊されたが、今日その跡地には学校（小・中合同）が建っている（一部教会）。遺構・遺物は発見できなかったが、敷地の一部に鳥居の柱らしき残骸が転がっていた（写真78）。なお、学校の近くにタガ遺跡があり、その側に長野の遺骨収集団や岐阜県マリアナ会などによって慰霊碑が建てられている⁽³²⁾、そこには天仁安神社の大燈籠の笠の部分や基礎・基壇の部分らしきものがあつた。

この他、関東州の小野田神社（大連市泡崖屯、1922年創立、セメント工場があつた）、満州間島省で最も早く、日本総領事館前に建てられた間島神社（1925年創立、龍井街）も学校の敷地になっていたが、遺構・遺物などは全く発見できなかった。

【病院】

病院となっているものは、二つある。一つは、先に紹介した樺太の樺太護国神社である。樺太護国神社の前身は、日露戦後の1908年豊原神社の招魂祭に始まり、1925年に大正天皇の大礼記念事業として同社の境内社として創建された樺太招魂社である。1935年に豊原町旭丘の樺太神社の南隣に移転し1939年護国神社の制度が施行されるとともに、樺太護国神社と改称された（写真79）。境内の敷地は6,000坪、これに周囲の山をあわせると清浄閑雅な神域は3万7千坪に及んだ⁽³³⁾。現在この境内地にはユジノ・サハリンスク市立病院が建っている（写真80）。病院は旧境内の階段を利用して、3段にわたって建てられ（写真81）、最後方はウィルス棟になっている。本拝殿部分はちょうど病院の後庭の役割を果たし、病院関係者や患者の散策地になっている。現在、遺構・遺物としては、階段、本拝殿の基壇（写真82）、燈籠基壇等が残っており、また病院の右側の通路の並木の下には、燈籠の基壇のようなものが残されており、「奉献／佐々木時造／昭和十年□月」の文字が彫られていた。さらに、後方、譲成中の土地には燈籠の笠の部分と思われるものが転がっていた。

もう一つは、関東州大連市霞町に建てられた沙河口神社である。1914年10月に創立され、大連神社に匹敵する規模をもった神社であった。大連神社は日本人住宅街にあつたため、現地人にとってはやや近寄り難い雰囲気をもっていたためか、大連神社よりこちらの沙河口神社の事をよく覚えている人が多かつた。

日本時代に建てられた沙河口駅前大通りを南に進むと、ロータリーにでる。その北東の角が神社跡地であるが、今日、大連市口腔医院の大病院が建っている。神社の遺構・遺物で確かなものは全く見つからなかつた。

【軍施設】

軍関係の施設になっているものとしては、まず台湾の花蓮港庁下に建てられた吉野神社跡地がある。



写真78 南洋群島 テニアン島に建てられた天仁安神社跡
今日、学校・教会の敷地になっているが、学校に敷地の中に、旧鳥居の残骸らしきものが、転がっていた。



写真79 樺太 旧豊原町に建てられた樺太護国神社本拝殿
写真82はこの基壇である（樺太庁前掲書、1536頁）



写真80 同前跡
今日、ユジノ・サハリンスク市立病院が建てられている。



写真81 同前
病院は旧階段を生かして、3段に建てられている。



写真82 同前
旧本拝殿の基壇。病院の最後方、裏庭のような恰好になっている。

吉野神社は先程紹介した豊田神社と同じく、官営移民村に建てられた神社で、花蓮港庁下では最も早く1912年に創立されている。

現在、神社跡地は半分に仕切られ、半分は旧郡長宅、そして残り半分が兵舎として利用されている。境内地を画する石垣はほぼそのまま残り、その中に日本家屋も残されているが、その他の遺構・遺物は見つからなかった。

中華民国の天津日本租界にある大和公園に建てられた天津神社は、中華民国に建てられた神社としては、青島神社について2番目に古い神社で、1915年に建てられた。現在、この地には「八・一礼堂」が建てられているが、神社の遺構・遺物は発見できなかった。

この他、中華民国の上海日本租界（英米共同租界）に建てられた上海神社（1933年創立）は、その境内に1932年の上海事変の戦死者を祀る招魂社を設けていたが、今日軍関係のビルが立っており、神社の遺構・遺物は全く見られない。また、関東州の旅順市の高台、大正公園に紀元2600年を記念して「満州の地に官幣大社」を、とのかけ声のもと、1938年に創立され敗戦の前年の1944年10月に鎮座した官幣大社関東神宮跡地には、今日海軍の施設が建てられている。⁽³⁴⁾

[その他]

以上、「改変」の例として神社跡地に工作物が建てられた場合を、主な工作物毎に見て来たわけであるが、最後にその他の例を見ていこう。

すでに、公園になっている例で一部見て来たが、樺太神社（写真83）の社殿跡地には、戦後すぐに共産党幹部のクラブハウスが建てられたが、今日では会社の事務所になっている（写真84）。また、朝鮮神宮の本殿（写真85）跡は植物園（温室）（写真86）になっているし、青島神社の本殿部分は今日、青島有線テレビ台（写真87）になっている。また、本殿跡地がジャングルの中に埋もれている例として紹介した、昭南神社の旧境内はゴルフ場の一角となっている。

その他、1933年に創立、翌年鎮座した台湾の総鎮守、官幣大社台湾神社（写真88）は、1944年6月、従来の北白川能久親王ならびに開拓三神に加えて、天照大神を合祀して台湾神宮と改称したが、その鎮座祭の直前の10月に飛行機が墜落、社殿の一部が炎上した。⁽³⁵⁾

今日、神社跡地には、台湾の代表的ホテル圓山大飯店（写真89）が建てられているが、神社の遺構・遺物は残っていない。

樺太の豊原神社は樺太の中心、豊原市豊原町に建てられた（後、県社）に。創立年は1910年で樺太において最も早い官幣大社樺太神社と同年であるが、創建はそれより2年早い1908年である。

戦後、敷地跡には保育園が建てられたが、数年前より用途変更されて、現在は死体検死所として使用されている。遺構・遺物としては、燈籠基壇らしきものと、鳥居の台石（饅頭）らしきものが、彩色されて（保育園時代に手が加えられたものか）残っている。

同じく、樺太の真岡神社（後、県社）は、豊原に次ぐ第2の都市、真岡町の高台に1910年に建てられた（写真90）。1945年8月のソ連軍の激しい真岡上陸作戦で社殿は炎上したが、正面アプローチ部分の階段、燈籠基壇、手水鉢などが残っている。今日、サハリン郵船会社の社屋（写真91）となっている。

また、樺太豊原に1924年に創立された北辰神社は、境内の周囲が巾着状に川に取り囲まれる独特な境内地であったが、その跡地は現在、5階建てのアパート団地になっており、神社の遺構・遺物は



写真83 樺太 旧豊原町に建てられた官幣大社樺太神社社殿部分
（『望郷樺太』、国書刊行会、1979年5月、48頁）

写真84 同前跡
戦後すぐに共産党幹部クラブハウスが建てられたが、現在は会社の事務所になっている。



写真85 朝鮮 旧京城府南山に建てられた官幣大社朝鮮神宮の本殿部分（「上の広場」）
（朝鮮神宮奉賛会編『恩頼 朝鮮神宮御鎮座10周年記念』、1937年11月、294頁）

写真86 同前跡
本殿部分は今日、南山公園の温室（植物園）になっている。





写真 87 中華民国 旧青島に建てられた青島神社殿跡
今日、青島有線テレビ台の建物が建っている。

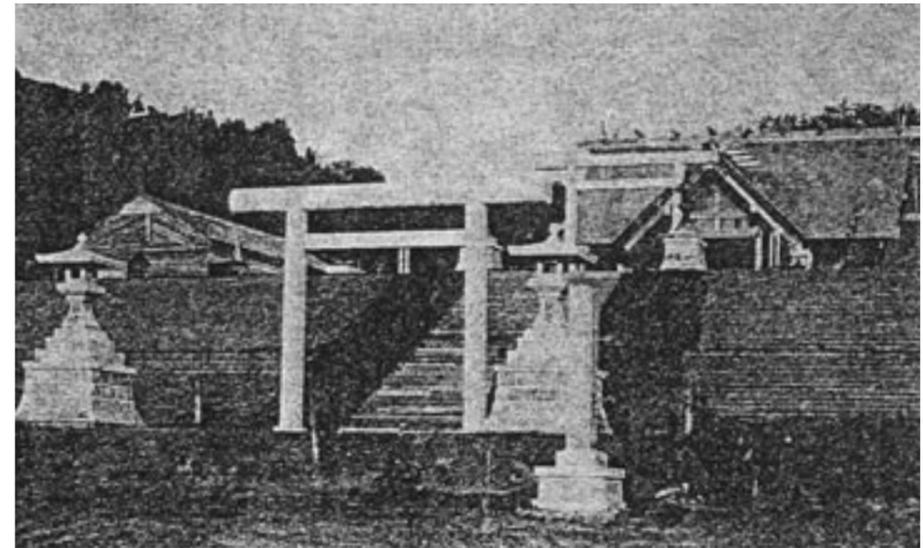


写真 90 樺太 旧真岡支庁下、真岡町に建てられた県社真岡神社
(樺太庁前掲書、1537頁)

写真 88 台湾 旧台北市に建てられ
た官幣大社台湾神社（神宮）
(松本暁美・謝森展前掲書、
241頁)



写真 91 同前跡
旧石段の上に建つ、サハリン郵船会社



写真 89 同前跡
今日、圓山大飯店が建ってい
る。

まったく見られなかった。

中華民国の北京神社は1940年に北京特別市布貢院に北京6万人の居留日本人の鎮守として建てられた。中華民国には、北京神社創立以前に、これまで紹介した、天津神社、青島神社、上海神社など25の神社が創立されていたが、この北京神社は中華民国の模範となるべき神社として建てられたものであった。実際、蒙疆神社、済南神社、南京神社などは、この北京神社を範として後に創られた。境内地は6,000坪で、占領地なので社格は持たなかったが、官国幣社並みの待遇を受けた。⁽³⁶⁾

現在、この地には中国社会科学院の建物が建っており、神社の遺構・遺物は残っていない。

この他、個人の住宅地になっているのは、先ほど紹介した南洋神社、それに関東州の柳樹屯稲荷神社（1919年、大連湾会王家屯）の跡地である。別の地に再建された、ペリリュウ神社の旧神社跡は採石（ライムストーン）場となっており、中華民国で最も早い1915年に創立された、青島の台東鎮神社は今日商店街となっている。これらの神社跡地では、いずれも神社遺構・遺物は確認されていない。

【畑地・牧草地】

営造物ではなく、畑地として利用されている神社跡地は、先に紹介した台湾の瑞穂祠の本殿部分（檳榔畑）、樺太の大山祇神社（1921年創立、野菜畑）、そして同じく樺太野田町の稲荷神社（創立年不明）の跡地（牧草地、写真92）である。



写真92 樺太 旧真岡支庁下、野田町に建てられた（野田）稲荷神社跡
現在牧草地になっている。手前、中央及び右側に旧燈籠の基壇らしきものがある。

IV 景観変容の要因

以上、海外神社跡地の残存状況や海外神社跡地の現況、その景観の変容について見て来た。日本の敗戦、植民地体制の崩壊により、機能を停止した海外神社の跡地が、今日、実に多様な景観をもって存在する事を確認出来たと思う。最後に、では、そのような多様な景観の変容をもたらした要因はいったい何であったのであろうか、まだ、仮説の段階であるが、この事を考えて見たい。

まず、第1に、海外神社跡地の景観変容の多様性を考える場合、戦前に日本の植民地や占領地となった地域（勢力圏）が、戦後、どのような国家体制をとったのか、例えば「社会主義国家」になった

のかどうかであり、また「社会主義国家」にならない場合でも、戦後から今日に至る、その国家と日本の関係——これには、日本の植民地支配の総括、戦争責任などのいわゆる「歴史問題」の存在や、領土問題の存在なども含まれる——さらにはその国、地域の国際的環境等、総じてこれら政治的要因が作用しているという事である。

例えば、神社が「再建」された例が、いずれも南洋群島の神社であったことである。今日、再建された6つの神社がある島（サイパン島とパラオ島・ペリリュー島・アンガウル島）は、戦後、アメリカの信託統治領になり、1975年にサイパン、テニアン、ロタ島などの1群が北マリアナ諸島連邦として、アメリカの自治領となった。また、1981年には、パラオ、ペリリュウ、アンガウルを1群として、パラオ自治政府が発足した。まず、こうした1970年代後半からのアメリカからの「独立」という事が、海外神社「再建」の一つの前提である。さらにこの両国は、パラオ共和国を筆頭に、親日意識の強い国とされている。両国にある「再建」された6つの神社の内、最も早い例が、1981年の彩帆八幡神社（サイパン島）であり、他もいずれも1980年以降に再建されているという背景には、こうした政治的背景が横たわっているのである。

いわば、日本の植民地時代の遺物ともいえるべき、神社の「再建」などは、「社会主義国家」体制をとっている、旧満州や中華民国（現中華人民共和国、以下、中国と表記）、あるいは樺太（1990年まで「社会主義」のソ連邦であった）といった地域では、宗教政策や領土問題とも絡んで不可能な事であった。

また、「歴史問題」を抱えている、朝鮮（現韓国）、中国でも不可能な事であった。結局、南洋群島の地域で神社の「再建」が可能であったのは、その地に作られた国家が「社会主義国家」ではなく、また「歴史問題」を表だって抱えてなく、さらに日本との関係が「良好」な国家であったから可能な事であった。

また、台湾において、例えば桃園神社が忠烈祠に「改変」されたとはいえ、旧社殿がそのまま残っていたり、あるいは同じく教会に「改変」されたとはいえ多くの遺跡・遺物を残していた新城社、さらには個人の所有地になっている玉里社を初め、台湾では神社跡地に多くの遺構・遺物を残しているのも、1972年の日中国交回復まで、日本が戦後、台湾の中華民国政府を、中国の唯一の正統政府としていたという事に見られる、日本と台湾の国家関係がその背景にあったのかもしれない。



写真93 中華民国 旧青島に建てられた青島神社社殿部分
青島有線テレビ台（写真87）はこの跡に建てられた。尚、写真左上の鳥居の台石（饅頭）は今日でも残っている（青島市档案馆・青島日報社編『百年青島』、2000年11月、青島出版社、19頁）。

第2に、海外神社跡地の現況、その景観変容の多様性は、神社跡地の属する国家や或いは日本国の社会の変動にも関係があると言う事である。例えば、境内が公園になり、また本殿部分が有線電視台になっている事を紹介した、中華民国の青島に建てられた青島神社の社殿は、実は、日本の敗戦後、一時期、壊されずに中華民国の忠烈祠に「改変」されていた⁽³⁷⁾。しかし中華民国政府が国共内戦に敗れ、中華人民共和国の支配に入ってから、さらに「改変」されて実業学校・新華学校となった。ここまでは、第1の国家体制の転換、政治的要因に関わるのであるが、しかし、この段階でも社殿は残っていた(写真93)。そして、この社殿部分が撤去されたのは、実は1960年代の後半の文化大革命の時期であったのである⁽³⁸⁾。この時期、中国の多くの廟や寺院が破壊されたが、青島神社の社殿が破壊されたのもこの時であった。中国の神社跡地の景観変容を考える場合、この文化大革命の影響は大きかったのではないかと推測している。

また、台湾は、1945年の日本の敗北によって、中華民国政府の支配下になるのであるが、2年後の国共内戦に敗れた国民党軍民の台湾流入時に起きた、台湾住民と(本省人)と中華民国政府(外省人)との衝突、いわゆる2・28事件の際、筆者が調査したものではないが、台中公園(台中神社跡地)の大鳥居が軍隊の手によって破壊されたり、また、台中の清水神社の社殿が、2・28事件の際、住民が立て籠もったため、軍隊によって破壊されたとの事である⁽³⁹⁾。

このように、同じ国家、政治体制のなかでも、その時々社会状況によって、神社跡地・社殿跡地の景観が変化しているのである。

また、旧南洋群島の6つの神社が再建された問題にしても、第1に述べた政治的要因とともに、日本側の社会の変化というものも関わっていた。南洋群島の神社が「再建」される背景には勿論、それを推進した日本人慰霊団や清流社などの願い、理念があるのだが、「再建」を受け入れる側の積極的理由としては、日本人観光客(戦没者遺骨収集団や慰霊団、さらには戦前この地に大勢移住していた沖縄の関係者を含む)⁽⁴⁰⁾の積極的誘致という問題があった。

彩帆香取神社の「再建」にあたっては、日本の香取神宮連合会とともに、サイパンの観光局が1役買っていた事、またテニアン島において旧神社跡地の草刈を月2回行っているのは、観光局の職員であった事、さらに、同島のNKK神社跡地には英語と日本語の解説版が建てられていた事、日之出神社跡地が、鳥居や燈籠を中心として公園化されていた事等々のことは既に見た通りである。その他、私たちが、パラオ島で南洋神社の「再建」運動に関わった現地の人からの聞き取りを行った際、こちらからの質問でもなかったにもかかわらず、「再建」運動をしている日本人たちが、「特別」の思想を持った人たちである事を率直に語ってくれた。でも、それでも、それによって、その人たちを含めて観光客が増える事の必要性を語っていた。

ところで、ここが大事な点であるが、こうした、日本人の観光客の積極的誘致が可能であったのも、1980年代以降の、日本社会のいわゆる国際化、海外旅行者・出国者の急増という、日本社会の変化という事があって、初めて可能であったという事である。

第3に、いうまでもない事であるが、海外神社が建てられた、その国や地域の「開発」の度合い、経済発展の度合い、それと関連して、神社が建てられ場所が都市部・市街地か農村部であったか、また、都市部・市街地のなかでも、中心部(平地)に建てられたのか、それとも山裾や丘の上に建てられたのかによっても、神社跡地の現況、景観変容の多様性が出てくるという事である。

例えば、台湾の、神社の木造建築物を含めて、そっくりそのまま利用している桃園縣忠烈祠(旧桃園神社)、また、木造建築物は残していないが、石造建築物を多く利用している天主教会(旧新城社)などの例も、戦後すぐの新しく作り変える経済的余裕がない中で、旧社殿・旧境内地をとりあえず利用したまでと考える事もできる。事実、先程紹介した高雄市忠烈祠の「高雄市忠烈祠重建記」によれば、「光復初期…殉国之壮烈乃就日人神社因陋就簡稍事修葺權作奉祀英靈之所…斯祠乃敵之遺物改建深為各界詬病…」とある。最初、忠烈祠は高雄神社の社殿を少し改造して利用していたが、「敵の遺物」(日本の植民地支配の痕跡)をそのまま利用している事が問題になったというのである。結局1976年に建て替えられる。

また、桃園神社の社殿をほぼそのまま利用していた桃園忠烈祠は1980年代後半に、その事が問題になった。台湾の経済的發展の中で、その余裕が出てきて、初めて、そのことが浮上してきたのである。しかし、結局、これは日本の植民地支配の遺物として、新たに読み替えられ新たな価値を付与される事で、そのまま残されることになった⁽⁴¹⁾。

また、台湾の場合、比較的、神社遺構・遺物が多く残っていたのは、筆者が集中的に調査した地域が台湾東部の旧花蓮港庁下であった事(27社の内、21社)、に影響されているのかも知れない。周知の如く、花蓮港庁下を含む台湾東部は、漢民族の多い西部(大陸側)と異なり、アミ族を中心として先住民族の多い地域であり、西部に比較して「開発」の遅れている地域である。もし、西部のある地域を集中的に調査すれば、違った結果が出てきたかもしれない。

こうした事は、南洋群島の神社の遺構・遺物が良く残っているという事とも関連する。

たとえば、南洋の神社はテニアン島に代表されるように、島の中心地に建てられた神社を除けば、多くは日本人移住者(南洋興発株式会社)が砂糖黍栽培の為に作った農場・村毎に建てられた。しかし、敗戦により、日本人移住者の引きあげ後これらの地の多くは放置され、開発されなかったため、テニアン島のように連邦政府の手によって草刈が行われている場合は草地として、そうで無い場合はジャングルの中に埋もれてしまい、結果として遺構・遺物がたくさん残っているという状況があるのである。

また、樺太も全体としては、「開発」の遅れた地域である。泊居神社は、鳥居、本殿基壇、燈籠基壇、記念碑、忠魂碑と神社の遺構・遺物がほぼ全部揃って残っている例として紹介したが、そこでも指摘した如く、この地は泊居の街を見渡し、さらに海を見晴らす事の出来る絶好のロケーションにある。現在、草地のまま放置されているわけだが、もしも、この泊居の地が、「開発」が進められ、人口が急増し、都市としての整備が必須になっていたならば、公園として整備されても良い地である。しかし、ソ連邦時代でも「開発」が進められなかった樺太の地域は、特にペロストロイカ政策の展開、そしてソ連邦の崩壊という「自由主義経済」の進展の中で、一部の地域を除いて、ますます経済的困難が増しているようである。この泊居の地は、かつて日本統治時代に漁業の他に、王子製紙の工場街として発展した街である。この神社の真下には現在もその広大な工場が立地している。そしてそれはソ連邦下でも稼働していたが、ペロストロイカ政策の中で操業を停止し、今日では、泊居に電力を供給する火力発電所として、細々と稼働している状況であった。こうした、泊居の経済発展の「遅れ」が、多くの神社遺構・遺物を残しているのである。

また、都市部、街の中の平地に建てられた神社は、新城社のように教会に「改変」され、その遺

構・遺物が良く残っている例もあるが、多くは公園として整備されたり、また大きな建物が建てられたりして、区画はなんとなく残されているが、神社の遺構・遺物はほとんど残っていないし、(吉林神社、沙河口神社、北京神社、天津神社等)そもそもその区画も変容をうけ、位置さえ確定できないものもある(台東鎮神社)。

第4番目に、神社跡地の景観変容の多様性は、その地域の文化伝統の違いと関連しているということである。

南洋群島ロタ島のロタ神社や和泉神社キリスト教祠に改変され、また、教会ではないが、サイパンの南興神社がキリスト教の墓地に改変されていた。これなどは、南洋群島が日本の委任統治領になる以前の400年にもわたるスペイン支配、その後のドイツの支配の中で形成されてきたキリスト教文化の現地人への浸透・定着がその背景にある。

また、台湾でかなりの神社が忠烈祠となっていた。忠烈祠の思想は、日本の靖国・護国神社と同じく、勿論、近代の国民国家による国民統合という新たな思想であるが、それにしても、人を神として祀る文化伝統の存在も見逃せない。また、神社の社殿がそれに利用されるということも、国、地域によって細かな部分での違いはあるものの、全体として見た場合の、日本、朝鮮、中国の廟、寺院、神社の社殿建築(燈籠や狛犬や鳥居も含む)の類似性という事も横たわっている。

最後に、5点目として、以上の4点と少し次元がことなるが、支配・勢力が交代した事の「刻印」いう点にふれておこう。神社跡地に教会や寺院、廟、或いは忠烈祠が建てられたという問題である。

世界史的にも見た場合、かつての支配者の宗教施設であったものを完全に破壊せず、むしろその痕跡を残しながら、その地に新しい支配者の宗教施設を作るとというのが、宗教勢力交代の一つのパターンであるということである。徹底的に破壊し、その痕跡を完全に消してしまったり、全く別の所に新しい支配的宗教施設を造るより、その方が、宗教勢力交代の印象を強く民衆に焼き付け、「刻印」し、かつての支配的宗教に対するダメージになるということである。

この事は、拙稿でインドの宗教紛争の発火源である、北インドのヒンズー教の聖地アヨディアにあるモスク(イスラム礼拝所)の例や、スペインのコルドバ観光の目玉商品であるメスキータという宗教施設がなぜ醜い外観をもっているかを例に紹介しておいたので、詳しくはそれを参照して欲しい。⁽⁴²⁾又、1966年に台湾を訪問した神職たちが、「形骸は殆んど昔ながらの姿をとどめながら」(この時点では、筆者が調査した1990年代以降よりも、神社跡地には、もっと多くの木造建築物を含む神社の遺構・遺物が残されていた=筆者)、忠烈祠という「全く内容的に変質された神社跡地に立ったとき」、「一種名状しがたい惨たる感慨が胸にこみあげて」、「ひそかな憤りを覚えた」。そして、点々として残っている鳥居や燈籠や狛犬などは「いっそこれらも除去してくればよいのに、という気持ちになった」⁽⁴³⁾と述べている事と関連する事である。

こうした、支配の交代の「刻印」という点では、第1の政治的要因の問題と絡むが、神社跡地が公園として整備あるいは再整備された場合、公園の名称や公園の造作物に植民地支配の打破を、あるいは新しい国家の成立を印象付ける(この中にはいわゆる「伝統の創造」も含む)名称がつけられ、造作物が建てられる。台湾の神社跡地で、壽社が中山公園として利用され、孫文の銅像が建てられている事を紹介したが、台湾において神社跡地が中山公園として利用されている例は他にも多くみられる。樺太神社跡地が勝利公園として整備され、兵士の銅像が建てられているのも、また、名称はその事を

意味していないが、公園の造作物として、南山公園(朝鮮神宮跡地)に安重根の記念館や龍頭山公園(龍頭山神社跡地)に李舜臣の銅像が建てられていることなども同じ意味合いであろう。

もっとも、近代の国民国家における公園は一般的にそういう性格を持っており、神社跡地だけがそのようになったわけではないが、神社跡地における、このような「改変」は、日本の支配の終了と新しい国家の誕生を人々により強く、「刻印」する上で大きな役割を果たしたであろう。

以上、海外神社跡地の現況とその景観変容の多様性をもたらした要因といったものを、5点にわたって指摘してきたが、実際は、これらの5点の内のいくつかが、相互に絡み合って増幅しあい、また消しあって、今日の神社跡地の景観を形作っているのである。⁽⁴⁴⁾

本稿で紹介した神社跡地の現況とは、あくまでも筆者の調査時点での現況である。調査年で最も早い例は、1990年であり、また本格的に始めたのも1992年といずれも10年以上も前のものである。確認していないが、その調査時点での現況、景観は、今日、2004年段階ではもう、異なっているものになっているかも知れない。また、これからも、変化していくであろう。しかしながら、その異なり方あるいは変化も、上に述べたような5つの要因が相互に絡み合って変化したもの、あるいは変化して行くものであるという事だけは言えるのではないかと考えている。

おわりに

以上、神社跡地の現況、景観変容を、これまで筆者が訪れた79の海外神社跡地を素材に検討してきた。最初に述べたように、この79の神社跡地は地域的な偏りがあり、最も多くの海外神社が建てられた朝鮮の神社跡地や、満州、中華民国に建てられた神社跡地の調査はこれからである。その意味で、このレポートはあくまでも中間的なものである。COEの残りの3年間の中で、これらの地域の神社跡地の調査を集中的に行い、海外神社跡地の現状、景観変容のサンプルを増やすとともに(資料化)、今回析出した5つの景観変容の要因の妥当性を検証し、体系化していきたい。

注

- (1) この、3班の課題については、香月洋一郎「環境と景観の資料化と体系化」(神奈川大学21世紀COEプログラム拠点推進会議『非文字資料研究』No.1, 2003年10月)参照。
- (2) この、海外神社跡地を素材とする研究は、筆者と富井正憲が中心となって行っているが、富井は海外神社が創立される前、創立されて以降、廃止されて以降の3つの時代の植民都市の空間の形成と変容の過程を、環境感という視点から考察を行う事を予定している。
- (3) 海外神社の全体像及びその研究史、今後の課題等は、さしあたり拙稿「〈海外神社〉研究序説」(『歴史評論』602号, 200年6月)参照。本稿でも、そこで紹介した海外神社研究の基本文献、各地の海外神社についての基本文献、論文等を参照したが、紙数の関係から一々列記する事は原則として避けた。従って、その点については拙稿を参照されたい。ただ、そこで落ちていた文献、あるいはその後の研究成果については記載していく。この点で、ここでは、前田孝和「神社本庁の海外神社調査史について—海外神社研究について—」(『皇學館論叢』27巻3号, 1994年6月)、辻子実『侵略神社—靖国思想を考えるために—』(新幹社, 2003年9月)をあげておく。
- (4) これについては、富井正憲、藤田庄市、中島三千男「旧樺太(南サハリン)神社跡地調査報告」(神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第1号, 2004年3月)参照。

- (5) これについては、富井正憲、中島三千男、大坪潤子、サイモン・ジョン「旧南洋群島の神社跡地調査報告」(神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化』第2号, 2004年12月刊行予定) 参照。
- (6) この調査は、2000年度神奈川大学共同研究奨励助成金(研究代表者、郷田正萬「東アジアにおける新国際秩序構築に関する研究」)による調査である。
- (7) この調査は、2002年度奈川大学共同研究奨励助成金(研究代表者、山口健治「環東シナ海伝承文化の総合的研究」)による調査である。
- (8) この調査は、文部科学省科学研究費補助金(2001年～2004年)、研究代表者木場明志「植民地期中国東北地域における宗教の総合的研究」による調査である。
- (9) 同上。
- (10) 注(6)に同じ。
- (11) 朝鮮においては、1945年8月16日～23日の1週間の間に、「神祠・奉安殿に対する放火・破壊」が136件と、「警察署に対する襲撃・占拠」などの149件に次ぐ多さであった(森田芳夫『朝鮮終戦の記録—米ソ両軍の進駐と日本人の引き揚げ—』, 巖南堂, 1964年, 94頁)。
- 終戦前後の神社のあり様は多様であった。上記のように、放火・破壊された神社(安東神社等)、戦闘・空襲によって炎上した神社(天仁安神社等)、日本人の手によって爆破されたり(昭南神社等)、焼かれた神社(南洋神社、朝鮮神宮本殿等)、また、米ソ両軍や現地政府に接収された神社(新京神社等)などであった。この点については、『神社本庁十年史』(1956年、神社本庁, 41頁～49頁)及び佐藤弘毅「戦前の海外神社資産一覧」(『神社本庁教学研究所紀要』第4号, 1999年2月)参照。
- (12) 以下、本稿で紹介する、神社の創立年、祭神、境内地などの基本的事項については、佐藤弘毅「戦前の海外神社一覧Ⅰ」(『神社本庁教学研究所紀要』第2号, 1997年3月)、同「戦前の海外神社一覧Ⅱ」(『神社本庁教学研究所紀要』第3号, 1998年2月)によった。なお、これをもとに、藪田稔・橋本政宣編『神道史大辞典』(2004年、吉川弘文館)の「付編」にも、佐藤編の「終戦前の海外神社一覧」が載っている。
- (13) 泊居神社及びその跡地の現況については注(4)参照。尚、以下本文において紹介する樺太の現況については全て、この注(4)の論文によった。
- (14) 玉里社及びその跡地については、拙稿「台湾・旧花蓮港庁下における神社の創建について」(岩井忠熊・馬原鉄男編『天皇制国家の統合と支配』, 1992年、文理閣)及び「台湾の神社跡を訪ねて」(『歴史と民俗』10号, 1993年8月、神奈川大学日本常民文化研究所)を参照。なお、以下、本文において紹介する台湾の神社の現況の内、1992年の調査に関わるものは、後者の論文によった。
- (15) 建国忠霊廟については、嵯峨井建「建国神廟と建国忠霊廟の建設」(『神道宗教』156号, 1994年9月)参照。
- (16) 注(11)の『神社本庁十年史』によると、新京神社は戦後ソ連軍の宿舎として利用された。現況の確認は、2004年9月に同僚の孫安石、大里浩秋によっても確認された。
- (17) 関子嶺神社の話については、注(14)拙稿(1993年)参照。但し、関子嶺神社という神社は、注(12)の佐藤論文(1997年)でも確認されていない。
- (18) この点については、横森久美「台湾における神社—皇民化政策との関連において—」(『台湾近現代史研究』4号, 1982年10月)、菅浩二「台湾最初の神社御祭神とナショナリティー—台南・旧開山神社(鄭成功廟)について—」(『國學院大學日本文化研究所紀要』第88輯, 2001年)参照。
- (19) 現在のところ、この5つの他に、今回の調査では、足を延ばす事はできなかったが、アンガウル島(パラオ共和国)のアンガウル神社がある。また他の地域の例としては、現地ではなく日本国内に「再建」された関東州の大連神社の例がある。これについては、注(30)参照。尚、南洋群島の神社及び現況については、『具志川市史』第4巻(2002年3月、同市編さん委員会編)の第3編第2章の「南洋群島」(今泉祐美子執筆)及び、第4回海外神社視察研修団『サイパン・パラオ戦没者慰霊の旅(報告書)』(1982年9月、神社本庁)それに注(5)の調査報告書参照。
- (20) 注(19)の神社本庁前掲報告書参照。
- (21) 南洋神社については、神社本庁前掲報告書及び『官幣大社南洋神社御鎮座祭記念写真帖』(1941年、同

- 神社奉賛会)参照。
- (22) ペリリュウ神社については、滑川祐二『ペリリュウ神社奉賛会設立趣意書』(1982年、ペリリュウ神社奉賛会事務局)参照。尚、これによるとペリリュウ神社は、1934年12月に鎮座した南興神社に由来するという事である(1頁)。
- (23) この神社は、注(12)の佐藤論文にも、『神道史大辞典』にも出ていない神社である。創立年代は不明であるが、残存している鳥居の柱には、「泉神社」「昭和十八年三月建立」と刻まれている。注(19)の今泉論文の「表15 神社」(676頁)にも記載がなく、ただ「図2サイパン島」(587頁)の泉村のところに神社のマークが付されている。
- (24) この神社も、注(23)の三つの文献には出ていない。但し、この神社と後出の、日之出神社との関連が不明である。この二つの神社は極めて近接した位置に建っており、日之出神社は佐藤の研究によれば、1939年に創立せられた神社で、その氏子区域は第4農場となっている。ところが、NKK神社も創立年は不明であるが(一の鳥居の柱に「昭和十六年一月十日」と刻まれている)、氏子区域はやはり第4農場であった。(同じく、一の鳥居の柱には「第四農場蔗作人一同」と刻まれている)。この点は、今後の調査に待ちたい。
- (25) 昭南神社及びその現況については、シンガポール日本人学校 小学部社会科担当部会「昭南神社」(シンガポール日本人会編『南十字星』4号, 1992年)、篠崎護『シンガポール占領秘史』(原書房, 1976年)の211頁～214頁、参照。
- (26) この、神社建設の位置、都市空間の中における位置付けについては、青井哲人「神社造営よりみた日本植民地の環境変容に関する研究」(京都大学博士学位論文, 2000年3月)参照。
- (27) 忠烈祠については、蔡錦堂「台湾の忠烈祠と日本の護国神社・靖国神社との比較」(台湾史研究部会編『台湾の近代と日本』(中京大学社会科学研究所, 2003年3月31日)参照。
- (28) 佐久間神社創建の事情については、山口政治・富永勝編著『東台湾太魯閣小史—研海支庁開発の歩み—』(1991年2月、花蓮港「新城・北埔会」)参照。
- (29) この碑の成り立ちについては、石上正夫『日本人よ忘るなかれ—南洋の民と皇国教育—』(1983年9月、大月書店)215頁～216頁参照。
- (30) 大連神社については、水野久直『明治天皇御尊像奉遷記』(1966年、赤間神宮社務所)、『大連神社八十年史』(大連神社八十年祭奉賛会, 1987年)、新田光子『大連神社史—ある海外神社の社会史—』(1997年、おうふう)等、参照。なお大連神社は、1947年3月ソ連側に引渡されたが、大連神社社司水野久直は3月同社の御神霊を捧持して帰国。赤間神宮欄宜に就任とともに復興(遷宮)事業に乗り出し、1980年赤間神宮境内に大連神社新社殿を竣工し、正遷座祭を行った。
- (31) 亜庭神社については、樺太・元亜庭神社社司山田信義「終戦と亜庭神社」(寒川神社社報『さがみ』第61号～67号, 1978年10月～1979年4月)参照。
- (32) これについては、注(29)石上前掲書210頁～211頁参照。
- (33) これについては、『北海道神社庁誌』(1999年、同編輯委員会編)の第2部第4章「樺太の神社」(執筆 前田孝和)1338頁参照。
- (34) 関東神宮については、石川佐中『関東神宮—悲劇の三百二十二日—』(1987年6月、平活版所)参照。
- (35) 台湾神宮については、蔡錦堂『日本帝国主義下台湾の宗教政策』(同成社, 1994年)、本康宏史「台湾神社の創建と統治政策—祭神をめぐる問題を中心に—」(台湾史研究部会・檜山幸夫『台湾の近代と日本』, 2003年、中京大学社会科学研究所)、菅浩二「台湾神社創建から戦時体制、廃絶まで—1901～1945—」(川村邦光編『戦死者を巡る宗教・文化の研究』2003年、大阪大学大学院文学研究科日本学研究室)参照。なお、又吉盛清『台湾 近い昔の旅—台北編—』(1996年、凱風社)では「1945年(昭和20)の敗戦によって、台湾神社は中華民国に接収された。この侵略主義のシンボルは、接収と同時に大槌やつるはしでもって徹底的に打ち壊されて跡形もなくなってしまった。打ち壊しは、長年の占領下の恨みを晴らすかのように進められたという。三基の鳥居はなぎ倒され、本殿は廢材となった。…台湾神社は台湾の地から消えてしまった」(270頁)としているが、1966年3月に行われた、神社新報社の現地調査では、燈籠、狛犬、玉

垣の一部などはまだ転々と残っている。旧手水舎も残るとしている（『神社新報』、1966年4月23日、第949号）。なお、この神社新報社の調査結果は注（14）の中島前掲論文（1993）の117頁から119頁に一覧表で掲載している。

- (36) 北京神社については、小笠原省三『海外神社史 上巻』（海外神社史編纂会、1953年）の「北京神社の奉斎まで」（251頁～273頁）参照。また中華民国の神社については、拙稿「戦前期・中華民国における海外神社の創立について」（『研究年報』20号、2002年3月、神奈川大学法学研究所）参照。
- (37) 『青島指南』（民国22年〈1947年〉、中国市政協会青島分会）に「山之西面有勝利後所建之忠烈祠（日本神社旧址）、斎祀抗戦八年戦区殉難軍民之英霊」とある。
- (38) 青島市档案館、孫保鋒氏の教示による。
- (39) 注35、前掲『神社新報』の記事参照。
- (40) 日本人の旧南洋群島地域の観光客（慰霊団も含む）は1970年代後半頃から急増、97年以降減少に転じたが、2000年から回復に向っている。ちなみにサイパン島では約50万人、その内の約75%を日本人が占める。（大野俊『観光コースでないグアム・サイパン』高文研、2001年7月、137-8頁）。又、ペリリュー神社再建に際しパラオ政府観光部長が来日した時、観光部長は、神社を含む「日本時代の名所古跡の復元は必要であるが、あく迄もその目的は観光資源に他ならないとの主張であった」（滑川裕二『ペリリュー神社奉賛会設立趣旨書』、同奉賛会事務局、1982年8月、16頁）
- (41) 台湾大学呉蜜察氏の御教示による。
- (42) 注（14）、拙稿前掲論文（1993年）参照。
- (43) 注（35）、神社新報社前掲記事参照。
- (44) もっとも、神社跡地が、戦後どのような現況を持ち、景観を変容させているのかは、注（11）で見たように、日本の敗戦前後に神社がどのような処遇を蒙ったのか、という事にも規定されている。しかし、この点の研究は今日十分に行われていないので、この点を組み込むのは後日を期したい。ただ、例えば、新京神社も大連神社も共に、その時期に社殿の破壊がなされなかったにも関わらず、今日、神社跡地の現況、景観の変容を異にしているのを見ても、本稿で析出した5つの論点は有効であると考えている。

【謝辞】

本稿は筆者の10数年にわたる、海外神社跡地調査の中間報告である。11度にわたる調査では、本当にたくさんの方々にお世話になった。1992年の台湾調査、2000年の北京・天津調査、2003年の旧樺太調査については、論文を発表し、そこで謝辞を述べているのでここでは省略させていただき、それ以外の調査でお世話になった方々のお名前を記して謝辞に代えさせていただく。

1996年の台湾調査では、玉山神学院（当時）の林道生氏、中京女子大学客員教授大場俊賢氏、シンガポール調査では、同志社大学土肥昭夫氏、琉球大学高嶋伸欣氏、現地在住のTETSUBUMI Ogyu氏、諸江修氏、坂田憲子氏、シンガポール日本人学校の北内伸子氏を初めとする諸氏、シンガポール日本人会の杉野一夫氏、シンガポール・オーラル・ヒストリー館、2001年の韓国釜山・京城調査では、郷田正萬氏を中心とする共同研究グループの諸氏、2002年の中国東北部（旧満州）調査では、龍谷大学の木場明志氏をはじめとする共同研究グループの諸氏、東北師範大学の林嵐氏、同曲暁范氏、吉林省社会科学院満鉄資料館の李力氏、延辺大学学生姜梅玉氏、延吉市在住崔景文氏、神奈川大学学生崔明玉氏 2003年の青島調査では、新潟大学の柴田幹夫氏、青島市档案館の孫保鋒氏、延辺大学学生姜梅玉氏、本年（2004年）の北マリアナ諸島連邦、パラオ共和国調査では、東京外語大学の内海孝氏、神社本庁の前田孝和氏、元南洋群島協会理事小菅輝雄氏の御令嬢太田敏江氏、北マリアナ諸島連邦日本人会ロタ支部長古川明於氏、現地人アントニオ・アタリック氏、北マリアナ諸島連邦歴史的文物保存館（ロタ島）、テニアン島在住の萩島武司氏、名鉄フレミングホテルの杉本氏、北マリアナ諸島連邦歴史的文物保存館（テニアン）、北マリアナ諸島連邦歴史的文物保存館（サイパン）のGenevieve S. Cabrera氏をはじめとする諸氏、北マリアナ諸島連邦博物館のNoel B. Quitugua氏、パラオ国立歴史的文物保存館のWalter R. Metes氏、同Lynda Dee Tellames氏。共同調査を行った富井正憲氏、大坪憲子氏、サイモン・ジョン氏

The number of overseas shrines built in the Asian region from the Meiji Restoration until Japan's defeat in 1945 have been identified to date is over 1600. There is clearly an opportunity to conduct further research in this area and since 1990 my team has been investigating the remains of these shrines. To date we have surveyed 79 sites, a figure which amounts to only 5% of the total. Based on these surveys this discussion will analyze changes in the scenery of the sites of these former overseas shrines and the major causes of such changes.

Initially one must consider how the remains of the 79 shrines are being used at present and how each site has changed with the passing of time. The sites can be divided into the following four categories. The most common category, with 53 examples or 67% of the survey, are shrine remains that have in some manner been transformed through human intervention. Examples of this transformation include the creation of parks, religious or remembrance sites, and one can often see the establishment of memorial stones, museums and other education-related facilities. The second most common category, with 20 examples or 25% of the survey, is where the remains of the shrine are neglected and unused so that in some instances the sites were completely consumed by the jungle. In the third category, of which there are 5 examples or 6% of the survey, all in the Micronesian region (formerly known in Japan as Nanyo), although the activities of the shrines were halted with the end of the war, they have been rebuilt and reconsecrated since the 1980s. In the fourth category, of which there is only one example or 1% of the survey, a shrine established over a former site of worship was returned to its original state after the war and 'resurrected'. This example is the shrine devoted to Coxinga (Tei Seiko in Japanese) in Taiwan. So the four categories can thus be labelled: 1) transformed; 2) neglected; 3) rebuilt; and 4) resurrected.

Having considered various changes in the appearance of overseas shrines, questions now remain over what instigated them.

Firstly there were the many political issues within pre-war Japan's colonies and possessions and its field of influence overall, regarding Japan's relationship with each emerging postwar nation. The strength of this relationship depended on what national structure was adopted (socialist or capitalist), and even in cases where capitalism similar to that of Japan was adopted various historical complications have remained. This issue goes some way to explain why all the rebuilt shrines discovered to date are solely in the Micronesian region. Secondly, even within the same national structure, there can be special cases where a nation or society dramatically changes direction. Examples of this are the Great Proletarian Cultural Revolution in Communist China and the February 28 Incident of 1947 in Taiwan. Thirdly, these changes depend on a number of geographical factors including the extent of development of the nation or region concerned, whether it is an urban or rural area, and in the case of an urban area, whether it is in the center of town or on the outskirts. Generally, as development of an area increases, shrine sites are less neglected and the sites are likely to be transformed in some manner. Fourthly, the causes of change are related to the cultural traditions of the nation or region concerned. This is the primary reason why transformation to another kind of religious site was most obvious in Taiwan and Micronesia. Fifthly, in a diversion from the previous four interrelated factors, where the shrine was a perceived symbol of Japanese domination, the shrine site became a place where it was possible to demonstrate a shift in political dominance and the religion that accompanied it by acting as a 'seal' denoting the new order. In this way many shrine sites in Taiwan have been transformed into sites of remembrance or Sun Yat-sen parks (where statues of Sun have been erected).

Undoubtedly these five causes are intertwined, exacerbate each other, and in some cases offset each other to produce the complex picture of the various overseas shrine remains that has emerged.